



世界をみつめて 『三国志』余滴4 —呉の竹簡と呂岱— 福原 啓郎

この連載も今回で最後。これまで、司馬仲達を狂言廻しの役柄として、諸葛孔明の陣歿（234年）、遼東遠征の敢行（238年）、明帝の崩御（239年）にまつわる逸話を、数珠繋ぎに、紹介してきた。この連環風の流れに沿うならば、明帝の崩御前後に魏へ使節を派遣した邪馬台国の卑弥呼に関する話題へと遷るのが自然であるかもしれないが、ここは敢えて三国の中でまだ登場していない呉の話で締めくりたい。

230年代当時の呉では、後に大皇帝おくりなと諡されることになる、かの孫権が帝位にあった。この時期の孫権は魏の背後にいる公孫淵との提携を熱望し、いろいろと働きかけたが、魏と呉を両天秤にかける公孫淵に翻弄されていた。そして、司馬仲達の遼東遠征後のことであるが、239年の三月には、海路、遼東の魏の守備隊を攻撃し、男女の捕虜を連れ帰っている。

実は、この時期の呉の元号が記された木や竹の札が、湖南省の省都である長沙市の古井戸から出土した。1996年（平成八年）のことである。千七百数十年ぶりに日の目を見たことになる。出土した木簡・竹簡などの総数は十数万点にもものぼる。

その中に『三国志』に伝をもつ呉の武将の名が見えるものもある。呂岱りよたいである。その一つが、「呂岱所領都尉」りよたい（「呂岱の配下の都尉が……」。□は、断簡、を示す記号）の竹簡（整理番号6-2378。『長沙走馬楼三国呉簡・竹簡〔壹〕』文物出版社、2003年、所載の写真参照）である。『三国志』卷六十、呉書、呂岱伝によると、呂岱は、荊州（現在の湖北・湖南）や交州（広東・広西・ヴェトナム北部）の鎮撫に尽力した、経験豊かな武将である。その呂岱が何故、竹簡に名が残っているかといえば、荊州で起こった反乱に関する。そもそも荊州



牧の劉表が事実上領有していた荊州の地は、その死後、赤壁の戦いの結果、曹操・劉備・孫権の間で三分された。いわば、天下三分のミニ版である。長江以南の領有に関しては、劉備・孫権間で係争が続き、それが関羽の死の一因となったのであるが、222年の夷陵いりょうの戦いにより、完全に孫権の版図に入っていたのである。そして、231年から234年までの足掛け四年間、この地で反乱を起こした武陵蛮に対する討伐が続いた。この反乱の糸を引いていたのは蜀である。討伐軍の司令官が鎮南將軍の呂岱と武陵郡出身の潘濬はんしんであった。武陵蛮は現在の湖南省の西部、洞庭湖に西から流れ込む沅江流域の山間部に分布しており、武陵の山中に設定された桃源郷を描く「桃花源記」を著した東晉の詩人陶淵明にもその血が流れていたという。さきほどの竹簡は、232年（嘉禾元年）の討伐軍への糧秣運搬の責任者である督軍糧都尉に関する一連の竹簡の一つである。糧秣は、荊州南部の中心都市である長沙の倉庫から前線に運ばれたのであろう。なお、『三国志』本伝によると、呂岱は256年に数えの九十六歳で亡くなっており、当時、七十二歳であったことになる。ただ、疑問が残るのは、「呂岱」と呼び捨てにするであろうか、という点である。たとえば、歩騭ほしつは「歩侯」、潘濬はんしんは「太常」（太常）など、「某侯」もしくはその帯びている官職名で表されている。釈文では「呂岱」と読んでいるが、あるいは「呂侯」であるかもしれない。王素・宋少華・羅新「長沙走馬楼簡牘整理的新収獲」（『文物』1999-5）、王素「漢末呉初長沙郡紀年」（『呉簡研究』第一輯、2004年）参照。

ちなみに、この呉の木簡・竹簡の出土に滋賀県が絡んでいる。というのは、長沙市内での再開発、具体的には、日本のスーパーマーケットチェーンの平和堂による商業ビルの建設のさいに偶然見つかったのであり、滋賀県を中心に展開している平和堂が長沙に進出した背景には、ともに琵琶湖と洞庭湖という日中それぞれの国を代表する湖を抱える滋賀県と湖南省の姉妹友好提携があったからである。そういえば、桃源郷をイメージしたMIHO MUSEUMが琵琶湖の南の桃谷という地にある。

ふくはら あきろう（教授・中国史）